

いづみ新聞

131号

発行日
発行者

平成十八年二月一日
若林区荒町二三〇
幸五郎まちづくり研究所
電話二六六 三三三一
一部十円 年会費二千元

一月二十七日

モーショナルト弁当売る

「あえてよかった

モーショナルトの誕生日」

一月二十七日。店の向いの荒町小学校で自主公開研究会という催しがありました。全国から小学校の先生、大学の先生方々が約四百人集まり、子供たちの授業を見ながら研究会という。どんな内容かわからないが、先生方が学び合って教育の質が向上するに越したことはない。一週間前にこの日のお昼の食事を商店街で受け持って欲しいという有りがたい情報を頂きました。学校の校門前の校長としては四百人の昼の食事がつまく行くようにとマップをつくり各店にも通知して準備をととのえました。昼の弁当を一ヶ所で何百個も出来ないし、残ってしまえばお店も困るので、二百二十個と一口目標をついて三ヶ所の弁当やさんに注文しました。弁当には統一の掛け紙をつくりました。デザインには、「この日はモーショナルトの二百五十周年誕生日でしたので『モーショナルト弁当』としました。たまたま一週間前に若林の文化センターでモーショナルトの演奏会があつて、モーショナルトの顔が載っていましたのでチャッカリ借用して、幸五郎は筆文字を加えて掛け紙をつくりました。何でモーショナルトなのかきかれそうなのでこの弁当はモーショナルトの曲を聞きながら作りましとかきそえました。まさにハッタリ。いい加減なアイディアで

すね。利用出来る物は何でも使うという幸五郎の「ソセブ」です。「この催しの前日、井上茂子校長さんが私に「宜しく」と挨拶に来ました。まかせて下さい」と私も太鼓判をおしました。このような荒町への来客は今までも度々ありました。その度、幸五郎はボスターと看板で暖かく尚かつ度肝をぬくような演出でお迎えて皆さんに喜ばれて来ました。井上校長の期待にこたえて、まず△二判の紙に「あえてうれしいモーショナルトの誕生日」とかいて、各店に貼ってもらいました。そして学校の入り口に四十センチ×三メートルの木枠に同じように太い字で「モー」と書きました。さすがに全国から集まった先生方も、この歓迎には目を丸くしていました。静岡から来たという先生は井上校長とは友達ということ、幸五郎さん「を吹きこまれていたらしく、開会前に私に会いに来ました。また、この長い看板一人であげられないので、登校前の孫の帆乃花と和佳奈に手伝ってもらいました。午前八時、四百人も先生が、この看板を横目に見ながらどんどんと荒町小学校の校門をくぐって行きました。さて、お昼の弁当は小学校の駐車場にテントをはって、十二時から売りました。この日は一度幸五郎のやきいもの日でしたので、やきいものと一緒に幸五郎新聞も配りました。ラジカセを持って来てモーショナルトの曲を

かけようと準備しました。ところが、電源がないので隣に借りに行きました。セカセカしていたので相手にいい印象をあたえなかったようで終っから「ありがとう」といいに行ったらムツトしていて、御礼はないのといわれました。うちの論理だが、何で御礼をはらわなきゃないと、こうちも不愉快になりました。せっかくのボランティア事業にちょっとやる気をなくしてしまいました。

弁当は二十ヶ位残りでしたが返品したくないので、手押し車に積んで売って歩きました。結局七ヶ残って私が全部引き取りましたがなんとか売りました。さて、近所のレストラン、食堂はみんな満杯でなんとか、町の活性化に貢献したようでした。ところが、我が店を、ほっぽりだしていたので売上がすくなくなりました。やきいものは焦げてしまつて売れ残りしました。自店はどうでも、荒町が繁盛すればいいのである。この日、催しが毎日あればですなと言われた。

一月二十八日

「手紙がきた」

「この日、新聞もあと一ヶ月で満一年になります。ますます好調で皆さんにおもしろいと言われます。つまく書こうと思っているわけでも有りません。才能があるわけでもありません。毎日特別な体験がおきていることもありません。日常の中に自分で非日

常になっているところにネタがかくされて、それを見つけて原稿にしているだけです。

一月二十八日この寒い今年の冬にしては、あったかい土曜の午後私と同じような帽子をかぶった背の大きいオジサン(同年輩くらい)が「この町内に『トト』豆屋があるはずだが」と通行人に聞いていたのを私が横取りし、街のことはオレに聞いてと、連坊にあるその店を私は教えてあげました。そしてチョット待つてと店にとびこんで新聞をもって来て無理やり彼におしこんで、もって行ってもらいました。幸五郎のいつもの行動パターンです。こんなことをしながら知らない人にも配っているのです。ところが二日後ポストの中に見知らぬ人から手紙が入っていました。前述の方からの手紙でした。パンコフできれいに打つてありました。おほめのことばでした。尚且つ私の新聞に赤線で字のまちがいがいっぱい指摘がしてありました。新聞の校正はしますが、いつもあせつて、一回だけの校正で出していますので、字のまちがいがあつたことは承知していましたが、次号からは二度校正して間違いのないようにしたいと思えます。但しお褒めの言葉もありました。私は早速御礼の手紙をだしました。翌々日又又手紙が来ました。私の店の写真をきれいにとって絵葉書風にして送ってこられました。私もすぐ返事をかきました。「私は江戸時代の人でアナグロ人間です。あなたのようにパソコンは出来ませんが手書きで手紙はたくさんかいています」と感謝をこめて返事をかきました。たった一枚の紙でこんな手紙のやりとりが出来ることは、すばらしいことだと思つて。

偶然といつか読売新聞の情

報紙「Cha」のレポーターの方が取材に「られて手紙をかこつ」といつテーマで一時間半取材を受けました。私の店では便箋、一筆箋がたくさんあります。なんとか売れて欲しいと、きれいに並べて有りませすがケイタイの時代になって手紙を書く人が少なくなつてしまいました。この機会に手紙を書くこつと運動を展開します。ぜひ私の提案にのつてくださるようお願いします。一年前に「こつとこつと」のふみ箱」といつ商品が発売しました。五十個はつれましたがその後売れてません。一筆箋、筆ペン、八分キ箋、切手が少し入つて¥1500です。電話は相手が何処にいるかわからないところにかかつて行きませす。手紙は郵便受けで待つていてくれます。皆さん手紙をかきまじょう。

一月二十九日

天気ポカポカの日曜日

二十九日、日曜に朝NHKラジオを聞いていたら、秋田の康徳座の伊藤もとはるさんの話が放送されていきました。彼は二十年前小坂鉱山のそばにある、この芝居小屋で一万何千日も芝居を続けて来たそつです。私も一度行ったことがありますが、明治時代に作つた芝居小屋で、こんな山の中に歌舞伎をやっているなんて、おどろいて見て来たおぼえがあります。そんな山中にお客さんがくるなんて、今の仙台の荒町商店街と比べて見ると想像絶するものがあります。今でこそ康徳産にも観光客がくるよつになつたそつですが、一万何千日のうちには一日客一人といつ日もあつたそつです。彼はその一人のお客さんに向かつて一生懸命演技したそつです。さて今日は日曜日、休みの日には中々客

が来てくれません。先ほどの伊藤さんの話と同じで、ひとりぐらには来てくれるでしょう。ひとりのお客様が私の店を選んで来てくれるであろう。今日は休んでいられない。このラジオを聞いて私は今日も一日頑張るべく中倉から歩いて荒町にむかいました。さて十時。店をあけましたが午前中はひとり、ふたりのお客さんでしたが、午後から七組もお客さんが幸五郎さん目当てにやつてきました。明治青年大学の奥村さん、宮崎から来たおばーちゃん、幸五郎新聞フアンの上浦さん。売上はそんなに有りませんでしたが、すこ嬉しく、店を開けた甲斐があつたと夕方、ワンカップ買って来て一人で乾杯してしまいました。日曜日はチャッチ「ロー」を書きかえる日でお金で買えないもの九個あげて下さい」と書きました。学院大の花生さんが店の前をとおりました。お金でかえないもの何と聞きました。彼女即「出会いと答えてくれました。今日一日売上は満足できなかつたが明日の売上にながらいい出会いがたくさん有りました。

一月二日

節分で、一度とこないで、

と言われた

こつとこつとは、商店街の理事長二十年やって、五年前にリタイアしました。次代の方々が引き続いてやっています。マスコミのつて有名になつた、皆さんに云われますが、継続は力なりの元気のイベントはあまりやっています。私としては不満です。そのはけ口ではありませんが、私を含めて四人の老人で荒町新鮮組といつまちづくりの委員会を組織して、えびす(十一月)月(どんと祭)練(まいり)そし

て、節分(二月)をガンバツてやっています。しかし、商店街の理事は表立つて協力してくれませぬ。きつとお店が忙しくて大変なんだろうと推測しています。それで私一人で二週間前にポスターを書いて町にはります。まちおこしを勉強に来た大学生に声をかけて手伝いをたのみました。

節分の二日前、店の前を通つた山田美智子さん(顔と声の美人)に突然、タレントの庄司恵子さんに来てもらえないかと声をかけました。彼女は目の前で、すぐケイタイで連絡をとつてくれました。二月三日は夕方あいているといつ返事でした。あの元気のいい恵子さんに来てもらつたら節分もにぎやかになると、期待がふくらんでしまった。小学校のこともたちにも手伝いをたのみました。市役所に行つて記者室のポストにもチラシを配つて来ました。町内には、六十枚ポスターを貼りました。毘沙門さんの前にも大看板立てました。今年は紙でマスを百個つくりました。中にいろいろ青ばた豆を私がガス台でいりました。紙のマスの底に三十粒程並べてビニール袋でラッピングしました。お店でも四十ヶ売りました。

さて当日、寒さはキビシイが快晴でした。声をかけていたこともたち、そしてあの元気のいい庄司恵子さんが和服姿にせつた」をはいて市民センターのロビーに現れました。「ロククネー」と仙台弁。こつてミートイキングして、ふた手に別れて豆をまくことにしました。ところが私の命令がきかなくなりました。皆な庄司恵子さんのチームに行つてしまったのです。ケイチームは庄司さんを中心にすっかり盛り上がっています。私はしかたなく、こども二人と学生一

人の五人で商店街の南側を一軒一軒たんねんに、ママをまいて歩きました。私ひとりが青鬼で青いシャツ、青いタイツでさむいが頑張りました。とよま寿司では親方が、いつものお神酒を出して励ましてくれました。根回しがよかつたのか、皆さん心よく祝儀を出してくれました。ところが、ある古い店に行きました。お神酒が入つて少し気合が入つていて、私の心意気が強すぎたのか、相手の感情を害したのでしよう。「二度とこないで」と言われてしまいました。

何だこの野郎」とイキナリお札と豆を取り返してその店を出ました。まあこんなこと、怒つてもしょうがないと更にまめまきをつづけました。最後二チームは、びしゃもんさんで時間どおり落ち合いました。「ご祈祷が丁度終つていました。ケイ」さんも拜殿に上がつて、こどもたちに豆といつしょにおみやげを投げました。いつばい子供たちが来ていました。今年も、節分、まめまき、無事終わりました。途中から少年野球のこともたちが手伝つてくれて、大声をあげてくれたし、それに、タレント恵子さんの元気な声、これこそ商店街の活性化でしょう。メダタシメダタシ。おかげでお賽銭沢山いただきました。残金はまちづくり委員会に入金、又次のイベントの資金にします。

荒町小の春日教頭、加藤先生にもご協力いただきました。感謝)